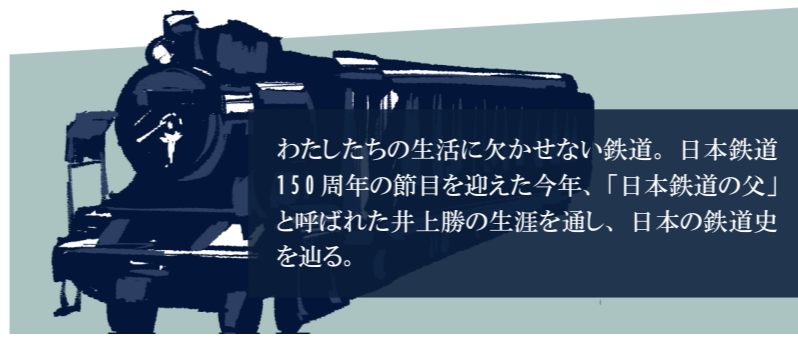


鉄道の父・井上勝



わたしたちの生活に欠かせない鉄道。日本鉄道150周年の節目を迎えた今年、「日本鉄道の父」と呼ばれた井上勝の生涯を通し、日本の鉄道史を辿る。

日本初の鉄道開業式典

1872年10月14日（旧暦9月12日）、新橋と横浜を結ぶ日本初の鉄道が開通し、同日開業式典が催された。

式典には当時21歳の明治天皇をはじめ、太政大臣や諸外国の公使、当時の有力者が数多く参加し、鉄道の魅力を日本国中にアピールする重要な式典となった。

この式典を取り仕切り、鉄道敷設の功労者として賞与の下賜を受けた人物こそ、のちに「日本鉄道の父」と呼ばれる当時28歳の井上勝（役職は鉄道頭）であった。

長州五傑と呼ばれた密航留学時代

井上勝は1843年長州藩士・井上勝行・久里子の三男として土原村浜坊筋（現・山口県萩市土原）に生まれた。幼名は卯八。のちに野村作兵衛の養子となり、野村弥吉と称した。

成長した弥吉は、勝行の影響で洋学への関心が強く、長崎にある幕府の海軍伝習所へ通い、オランダ士官から洋式兵法などを学んだ。その後

ことに成功。日本人だけで逢坂山隧道（トンネル）を開通したのを皮切りに、以後、鉄道の建設も運転も日本人主導で行われるようになった。

井上勝と鉄道

勝は自分の仕事は「クロガネ之道作」であるとし、政治には関与せず、鉄道作りに奔走した。明治新政府の財政難などもあり鉄道の民営化が進むなか、鉄道国有化を固く訴え続け、それが元で周囲の反感を買ったが、その後も鉄道と関わる仕事を続けた。

晩年の勝は、「吾生涯は鉄道を以て始まりすでに鉄道を以て老ひたりまさに鉄道を以て死すべきのみ」と日ごろから言い続けていた。その言葉の通り、1910年、鉄道院顧問として日英博覧会への参加と、鉄道視察のために渡欧した先のロンドンで客死。生前「我死セハ魂魄永ク此ニ在テ鉄道ノ看守タルヲ得ン」と勝が言っていたように、墓は東海道線が一望できる東京都品川区の東海寺に建てられた。その墓碑には先に死去した妻の宇佐子、長男亥六も一緒に名前が刻まれている。

も蕃書調所（現・東京大学の源流）や函館の武田斐三郎の塾で洋学の理解を深めていく。青年時代を幕末の動乱の只中で過ごし、弥吉は吸収した西欧の新知識を、国に役立てることを志していた。

弥吉の属する長州藩では、武力で外国を追い払おうとする機運が高まっていた。その一方で西欧に藩士を密航させ、最新の知識や技術を手に入れようと秘密裡に画策していた。弥吉は藩の合意のもと、伊藤俊輔（博文）、志道間多（井上馨）、山尾庸三、遠藤謹助らと共に脱藩。6月27日（旧暦5月12日）イギリスへ密航留学する。

数か月の航海を経てイギリスに着いた彼らは、ウイリアムソン教授の自宅に寄宿しながらユニバーシティ・カレッジ・ロンドン（UCL）に通った。UCLは教育の機会均等を訴え、人種・宗教・性別に関係なく、すべての人に門戸を開いた。弥吉はそこで、鉱山・土木・鉄道の勉強に励み、実際に現場へ足を運び、実践的な技術も習得していった。

幕末の日本と鉄道

大変な酒豪で、ロンドン留学時代には「呑乱（ノムラン）」というニックネームがつけられ、修了証書の名前が「Mr.Norman」と表記されたなどというエピソードもある。また、勝はいままで鉄道開発のために美田良圃を潰してきた。荒野が手付かずで放置されているのであれば、開墾し農牧の地にしたいと、1891年に牧畜を主体とした農場を岩手山麓に開設。日本鉄道会社副社長小野義真、三菱会社社長岩崎弥之助と共に開設した農場は、三人の頭文字をとって小岩井農場と命名され、現代でも食卓を彩っている。

井上勝あれこれ



▲東京駅前銅像（シビブリア編集部撮影）

故郷の山口県萩駅にはロンドン留学時代の銅像が、東京駅の前にはスーツを着た姿の銅像がそれぞれ立っている。

江戸時代末期、日本にとって鉄道とはどのようなものだったのか。日本に初めて鉄道を伝えたのは、海外事情の情報冊子『風説書』の別冊である『別段風説書』だ。刊行物として一番早いのは、オランダから入った情報を、薩摩藩の蘭学者川本幸民が翻訳し、1854年に刊行した『遠西奇器述』と言われている。

刊行物以外では、1853年ロシアのプチャーチンが佐賀藩で鉄道の模型を披露。その翌年にアメリカのペリーが再度来日した際、將軍への献上品の一つとして蒸気機関車の模型を持参し、幕府の応接係の前で運転を見て見せた。この蒸気機関車模型に乗った朱子学者河田迪齋は、「火発して機活き、筒、煙を噴き、輪皆転じ、迅速飛ぶが如く、旋転数匝（数回）極めて快し」と日記に記している。また、日本人で初めて鉄道に乗った土佐藩のジョン万次郎（中浜万次郎）は、アメリカで乗った鉄道の速さを「飛ぶ鳥のようだ」と報告している。

鉄道建設初期

弥吉は1868年にUCLを卒業。修了証書を受け取り、山尾庸三

井上勝簡易年表

1868	ロンドン留学終了。帰国
1869	井上勝と改名。大蔵省造幣寮造幣頭兼民部省鉱山司鉱山正となる
1870	民部権大承に任ぜられる
1871	工部省鉱山寮鉱山頭兼鉄道寮鉄道頭に任ぜられる
1872	鉄道頭専任となり、東京・横浜間鉄道開業式に参列する
1873	鉄道頭を依願免本官
1874	鉄道頭に復職。工部少輔に任ぜられ、工部省鉄道局長を仰せ付かる
1877	工部少輔兼鉄道局長となる
1879	大阪停車場二階に工技生養成所を設置する
1879	工部技監に任ぜられる
1881	技監のまま工部大輔に任ぜられる
1887	華族に列せられ、子爵を授かる
1890	内務大臣のもとに鉄道庁が設置され、鉄道庁長官に任ぜられる
1891	小岩井農場を創業する
1892	鉄道庁通信省に移管され、鉄道庁長官に任ぜられる
1893	願により鉄道庁長官を免ぜられる
1894	鉄道会議議員を仰せ付かる
1896	汽車製造会社を設立する
1899	帝國鉄道協会名誉会員となる
1901	韓国・清国の鉄道事情の視察に出席する
1905	京釜鉄道開業式に参列する
1906	鉄道五千哩祝賀会で大隈・伊藤と共に頌功表を贈呈される
1909	帝國鉄道協会第三代会長に就任する
1910	鉄道院顧問に就任する
	鉄道院顧問として、鉄道視察のため渡欧する
	英国ロンドンで死去。享年68